

史跡等の指定等

《史跡の新指定》 9件

1 鎌倉街道上道【埼玉県入間郡毛呂山町】

鎌倉街道は、鎌倉時代から室町時代にかけて整備された鎌倉と関東諸国を通過して各地を結んだ主要街道の総称である。鎌倉から武蔵国・上野国を経て信濃国・越後国へ向かう街道を上道と呼んだ。

今回指定するのは、埼玉県入間郡毛呂山町域の上道で、街道跡は北から鎌倉街道B遺跡・同C遺跡・同A遺跡・仏坂遺跡の総延長1,305.9mと、B遺跡を挟んで両側に広がる堂山下遺跡、その西側の崇徳寺跡に比定されている箇所、堂山下遺跡と崇徳寺跡の南側一帯に広がる川角古墳群の一部からなる。

街道跡では掘割遺構や路面、側溝等の道の遺構が良好に保存されている。中世の集落跡である堂山下遺跡は苦林宿に比定され、12世紀末から15世紀までの遺物が見つかっている。崇徳寺跡に比定される箇所では墓域中心部において板碑を立てて固定した跡が39か所確認されており、川角古墳群でも中世板碑が確認され、特に22号墳は崇徳寺跡の墓域造成の基準となっていた可能性がある。中世段階の川角古墳群のうち上道に直交する墳丘の範囲は、苦林宿の内と外を隔てる境界としての役割を担っていたと想定される。

このように、鎌倉街道上道は、中世の街道の遺構が良好に保存されているだけでなく、宿場と墓域、その境界という一体的な空間が残されており、中世の街道の状況を明らかにする重要な遺跡である。

2 夕田墳墓群【岐阜県加茂郡富加町】

濃尾平野の北東端、川浦川左岸の丘陵地の入り口部丘陵上及び谷奥の舌状丘陵突端部に築造された、蓮野1号墳（墓）、夕田茶臼山古墳の2基からなる墳丘墓及び古墳。

蓮野1号墳（墓）は平野部を見下ろす丘陵前端の頂部に立地する直径約15mの円丘状の主丘部に主丘部直径とほぼ同じ幅の方形に近い突出部が取り付く、墳長28mの突出部付の墳丘墓の可能性が指摘されている。夕田茶臼山古墳は前方後円墳で、墳長39.5m、後円部径24.5m、前方部長15.0m。前方部前面には墳丘と丘陵を画す溝が掘り込まれている。埋葬施設は木棺直葬である。3世紀中頃の築造である。

東海地域においては弥生時代後期後葉に前方後方形の墳丘墓が出現し、終末期後半に増

加することが知られている。夕田墳墓群はそれとは異なる墳丘墓の展開が指摘されており、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての墳墓の展開を考える上で重要である。中でも夕田茶臼山古墳は、当該地域においていち早く造られた前方後円墳であり、前方後円墳の東日本への広がりを考える上で重要である。

3 芥川城跡【大阪府高槻市】

芥川城は、室町幕府の管領・細川氏が築き、戦国時代には畿内周辺を支配し政権を担った三好長慶の本拠となった山城跡で、北・西・南の三方を芥川によって隔てられる標高182mの三好山に築かれ、東西約500m、南北約400mの摂津国最大規模を誇る。眼下には大阪平野北部と西国街道が一望できる。寺社文書や公家の日記、連歌の記録等、豊富に残る文献史料から、永正13年（1516）に「新城」として登場し、永禄12年（1569）に高槻城が築かれ城郭機能を失ったことがわかる。高槻市の発掘調査等により、総計28の曲輪が3群に分かれて配置され、要所に石垣が築かれていた等、戦国時代後期の城郭遺構が良好に遺存していることが確認された。西曲輪群にある主となる曲輪では、前面に広場をもつ礎石建物跡、直下の曲輪からは倉庫とみられる埴列建物跡が検出されている。灯明皿と推定される土師器や、天目茶碗、風炉片などが見つかると、饗応の場として機能していたことが判明した。

三好長慶政権の政庁機能をもった城跡で、その後、織田信長が足利義昭を奉じて入京する際に滞在するなど、我が国戦国時代後期の畿内を中心とする政治・軍事の様相や、織豊系城郭出現前の城跡の様子を知る上で貴重である。

4 郡山城跡【奈良県大和郡山市】

奈良盆地の西ノ京丘陵南端に位置する近世城郭。天正8年（1580）に筒井順慶が入城し、その後天正13年（1585）に豊臣秀長が大和・和泉・紀伊の100万石を領有して入り、畿内統治の拠点として大規模に整備された。秀長没後は、秀長甥の豊臣秀保、増田長盛ら豊臣政権の要職を担う人物が城主を務め、この間に総構が完成したとされている。関ヶ原の戦い後、一時城主が不在となったが、元和元年（1615）に水野勝成が入城し、その後、本多、松平と譜代大名が城主を歴任し、享保9年（1724）に

は柳澤^{やなぎさわ}氏が城主となり明治時代を迎える。城の構造は、堀に囲まれた本丸を中心に、東に毘沙門^{びしゃもんくるわ}曲輪、その北に常盤^{とぎわ}曲輪や玄武^{げんぶ}曲輪、本丸の西側に厩^{うまや}、その南に緑^{みどり}曲輪が位置する。本丸には北側に天守台が配される。天守は関ヶ原の戦い以後に解体され、天守台の発掘調査によって礎石^{そせき}が確認されている。石垣については、中心部の曲輪を主体として堀の法面^{のりめん}の大部分に築かれ、本丸付近に自然石の石積み、東に位置する毘沙門曲輪から東方の陣雨^{じんぼ}曲輪にかけて粗割材^{あらわりざい}を利用する石積み、御殿^{ごてん}のあった二ノ丸や緑曲輪にかけては花崗岩^{かこうがん}の割石による石積みである。本丸の石垣には石仏や寺院の礎石などの転用石材^{てんようせきざい}が多く含まれている。

以上のように、郡山城跡は、大規模な石垣をはじめとする遺構群が現存し、豊臣政権による築城の様相が明らかになるとともに、豊臣政権の畿内支配の一大拠点となり、その後は近世を通じて大和国の中心としての役割を持ち続けた重要な城である。

5 新宮下本町遺跡【和歌山県新宮市】

新宮下本町遺跡^{くまのがわ}は熊野川の河口から約2 Km、史跡新宮城跡^{しんぐうじょうあと}の西麓の熊野川に面した自然堤防上に立地する中世の港湾^{こうわん}関係の遺跡である。新宮は太平洋航路における重要な港湾としても知られ、平安時代末期以降、主として熊野三山^{くまのさんざん}による太平洋の海運を利用した各地との交流・交易の記録が残る。

新宮市教育委員会による発掘調査によって、12世紀後葉から16世紀中頃にかけての港湾に深く関係すると考えられる遺跡が確認された。遺跡は14世紀末頃から15世紀にかけて最盛期を迎え、熊野川に面した自然堤防の斜面地を石垣を用いて段状に造成した面から複数の地下式倉庫群^{ちかしきそうこくぐん}や鍛冶^{かじ}遺構が検出されるとともに、それに直交して石段を伴う通路を設けている。また、この時期には、出土遺物から交易範囲の拡大が想定されるなど、港湾都市として機能したことが明白となる。

新宮下本町遺跡は中世以降、太平洋の海運の重要な拠点であった新宮における港湾や海を介した交流の実態を知る上で重要なだけでなく、中世の海上交通と宗教勢力との関係や、平安時代末頃以降から全国へ信仰が拡大する熊野三山の経済基盤等について考える上でも重要である。

6 くまもとほんたかせこめぐらあと 熊本藩高瀬米蔵跡【たまなし 熊本県玉名市】

熊本藩高瀬米蔵跡は、熊本県北部を流れる菊池川下流に石積で築かれた船着場をもち、流域の村々から舟運で運ばれてきた年貢米の集積・搬出の拠点となった米蔵施設の遺跡である。江戸時代に描かれた絵図では10棟の蔵が並び、広場には米の品質を検査する場である「御米山床」の表記が見える。建物は隣接の藩主らの休憩施設である高瀬御茶屋とともに、明治10年（1877）の西南戦争で焼失した。玉名市教育委員会の調査で蔵の礎石列が検出されている。米蔵に付属する高瀬船着場跡には、護岸の石垣、波を消し水流を弱める設備である「ワク」、米蔵へ荷の積み下ろしする階段（「揚場」）と、斜路（「俵転がし」）の遺構が現存する。江戸時代後期、荷揚げ量増大に合わせて船着場は下流側に拡張され、従来のものは旧渡頭、拡張された船着場は新渡頭と呼ばれ、新たに築かれた「俵転がし」1基も現存している。さらに、菊池川の河床上昇による遡航輸送困難に対応するため、河口部の晒に支所機能を担う船着場が作られた。米蔵や番所等は現存しないが、晒船着場跡にも「ワク」や俵転がしの遺構が残る。

高瀬の米蔵跡と船着場跡、晒船着場跡は、菊池川の水運と、全国有数の米の産地の積出し港の機能等を知る上で貴重な遺跡である。

7 とどろきかいづか 轟貝塚【うとし 熊本県宇土市】

轟貝塚は、有明海沿岸部に位置する縄文時代早期末から後期中葉の貝塚を伴う集落である。本遺跡は九州地方の縄文時代早期末から前期の指標となる轟式土器の標式遺跡で、遺跡中心部に形成された貝層の内外からこれまでに69体の埋葬人骨が検出されている。大正期の「石器時代人種論」には、本遺跡から出土した人骨も議論され、京都帝国大学の鈴木文太郎や清野謙次、東北帝国大学の長谷部言人ら形質人類学者が発掘調査に参加して、詳細な記録を残した。

戦後、熊本大学の松本雅明は遺跡から出土した土器の型式学的分析を行い、轟式土器の分類と編年を確立し、後続する管畑式土器との関係についても整理した。また、近年の宇土市教育委員会の発掘調査では人骨や動物遺存体の各種分析を行い、本遺跡で行われた生業と遺跡周辺の高環境も明らかにされている。

このように、本遺跡は、貝塚から出土した多種多様な遺物を通じ、九州地方における縄

文時代の社会と墓制^{ほせい}について知ることのできる重要な遺跡である。

8 里官衙遺跡【大分県大分市】

里官衙遺跡は、大分市東部の大野川^{おおのがわ}と丹生川^{にうがわ}に挟まれた標高42mの城原台地上^{じょうはる}に立地する。文献史料によれば、古代において城原台地周辺は、海部郡^{あまべぐん}の佐井郷^{さいごう}に編成されていたことがわかる。城原台地には100m四方の平坦地が広がる。発掘調査によって、7世紀中ごろから8世紀前半にかけての掘立柱建物跡^{ほったてばしらたてものあと}や竪穴建物跡^{たてあなたてものあと}等が検出された。これらの遺構は、検出遺構や出土遺物の詳細な調査により5期に区分される。

なかでも3期（7世紀末～8世紀初頭）には、複数の大型掘立柱建物群が「コ」の字状に配置され、中央には中心的な建物が配置された空間となり、海部評^{あまべのひょう}の役所と考えることができる。4期以降（8世紀前半）にこれらの建物が廃絶され、小規模な掘立柱建物群や倉庫群が展開するなど、奈良時代に入って徐々に西方の城原地区へと官衙^{かんが}としての機能が移転したと考えられる。

このように里官衙遺跡は、古代における地方官衙の成立と展開を知る上で重要である。

9 立切遺跡・横峯遺跡【鹿児島県熊毛郡中種子町・南種子町】

立切遺跡は、種子島中部^{たねがしま}の標高120mの台地上に立地する。発掘調査によって、後期旧石器時代前半期の落とし穴遺構24基、礫群^{れきぐん}5基、焼土跡^{しょうどあと}12基、炭化物集中3か所等が確認された。落とし穴遺構はいずれも種IV火山灰層^{たねよんかざんばいそう}（約3万5千年前）下位で検出され、断面はフラスコ形と筒形で、上端開口部はいずれもラッパ状に開く特徴をもつ。礫群には明確な焼土や炭化物が見られる。出土遺物は磨石^{すりいし}や局部磨製石斧^{きょくぶませいせきふ}等の礫石器^{れきせつき}が主体である。

横峯遺跡は種子島南部の標高120mの台地上に立地する。発掘調査では、立切遺跡同様に後期旧石器時代前半期の礫群9基と炭化物集中10か所等が検出され、礫群には明確な掘り込みを持つものがある。石器は台石^{たいいし}や磨石^{きつき}のほか、削器等^{はくへん}の剥片石器も認められる。

両遺跡は文化層の年代や変遷が共通する。さらに、両遺跡における植物質食料^{しょくぶつじつしょくりょう}加工具^{かこうぐ}の卓越^{ばっさいぐ}や伐採具^{しょうようじゆりん}等の存在は照葉樹林^{しょうようじゆりん}を主体とする森林環境への適応を示しており、立切遺跡の遺構は生業のあり方を、横峯遺跡の遺構は居住のあり方をよく示している。これらが古本州の南端でいち早く出現した点は、旧石器時代の現生人類の環境への適応過程

を理解する上で重要である。

《特別史跡の追加指定》 3件

1 無量光院跡【岩手県西磐井郡平泉町】

12世紀後半、奥州藤原氏第3代の藤原秀衡が宇治の平等院に倣って造営した寺院跡。土塁で囲まれた内部に、三つ島を配した池があり、中心の中島には阿弥陀堂が設けられていた。今回、西端を区画する土塁と堀が残存する指定地南西側を追加指定する。

2 常陸国分寺跡【茨城県石岡市】

天平13年(741)、国分寺造立の詔によって建立された国分寺跡の一つ。金堂、講堂の基壇が南北中軸線上に並ぶ。西廻廊と推定される礎石や、指定地外の調査では寺域を限る西築地塀と思われる遺構も検出されている。今回、平安時代再建の塔と推定される版築遺構について追加指定する。

3 藤原宮跡【奈良県橿原市】

持統天皇8年(694)から和銅3年(710)まで営まれた古代の都城跡。藤原京跡の中心部に位置し、約1km四方の区画内に内裏・大極殿、役所群が建てられた。指定地南西部等で条件の整った部分を追加指定する。

《史跡の追加指定及び名称変更》 3件

1 綴喜古墳群【京都府八幡市・京田辺市】

おおすみくるまづかこふん
大住車塚古墳

やわたにしくるまづかこふん
八幡西車塚古墳

てんりやまこふんぐん
天理山古墳群

いのおかくるまづかこふん
飯岡車塚古墳

古墳時代前期後半から中期初頭(4世紀)に木津川左岸に造られた前方後円墳及び前方後方墳。当時の政治的動向と首長墓の築造の実態を知るうえで重要である。既指定の大住車塚古墳に八幡西車塚古墳、天理山古墳群、飯岡車塚古墳を加えて綴喜古墳群へと

名称を変更する。

2 さぬきへんろみち 讃岐遍路道【香川県さぬき市】

まんだらじみち
曼荼羅寺道

ぜんつうじけいだい
善通寺境内

ねごろじみち
根香寺道

しどじけいだい
志度寺境内

おおくぼじみち
大窪寺道

くうかい
空海ゆかりの霊場を巡拝する信仰の道。これまでに讃岐国（香川県）分として、曼荼羅寺道、善通寺境内、根来寺道、大窪寺道を指定している。今回、第86番札所しどじ志度寺境内を追加する。

3 いよへんろみち 伊予遍路道【かみうけなぐんくまこうげんちょう愛媛県上浮穴郡久万高原町】

かんじざいじみち
観自在寺道

いなりじんじやけいだい りゅうこうじけいだい
稲荷神社境内及び龍光寺境内

ぶつもくじみち
仏木寺道

めいせきじけいだい
明石寺境内

だいほうじみち
大寶寺道

だいほうじけいだい
大寶寺境内

いわやじみち
岩屋寺道

いわやじけいだい
岩屋寺境内

じょうるりじみち
浄瑠璃寺道

よこみねじみち
横峰寺道

よこみねじけいだい
横峰寺境内

さんかくじおくのいんみち
三角寺奥之院道

空海ゆかりの霊場を巡拝する信仰の道。これまでに伊予国（愛媛県）分として、札所ふだしょ寺院3箇所、遍路道6箇所を指定している。今回、大寶寺境内、岩屋寺境内、浄瑠璃寺道じいんを追加する。

《史跡の追加指定》 18件

1 仙台郡山官衙遺跡群【宮城県仙台市】

こおりやまかんがいせき
郡山官衙遺跡

こおりやまはいじあと
郡山廃寺跡

律令国家が東北経営のために設置した城柵跡。7世紀中頃のⅠ期官衙と、Ⅰ期官衙を取り壊して、建物等の向きを真北方向に建て替えた7世紀末頃のⅡ期官衙及び郡山廃寺跡からなる。今回、Ⅱ期官衙の外郭南辺部周辺を追加指定する。

2 脇本城跡【秋田県男鹿市】

日本海に突き出た男鹿半島付け根南岸の丘陵上に展開する大規模な山城で、中世末の安東氏の居城。今回、城跡北部の乍木地区の一部を追加指定する。

3 阿津賀志山防塁【福島県伊達郡国見町】

文治5年（1189）の源頼朝が率いる鎌倉方の奥州遠征に備えて奥州藤原氏が構築した防御施設。阿津賀志山中腹から阿武隈川にかけての約3.2kmにわたり築かれ、当時の土木技術や防御思想を知る上で重要。条件が整った地点を追加指定する。

4 午王山遺跡【埼玉県和光市】

埼玉県東南部、荒川を望む独立丘陵上に位置する弥生時代後期を中心とする大規模な環濠集落で、多数の竪穴建物と丘陵縁辺部に掘削された多重の環濠が検出された。今回、丘陵上の一部で条件の整った地点を追加指定する。

5 斐太遺跡群【新潟県上越市】

ふきあげいせき
吹上遺跡

ひだいせき
斐太遺跡

かまぶたいせき
釜蓋遺跡

斐太遺跡群は、新潟県南西部の高田平野に所在する弥生時代中期中葉に成立した吹上遺

跡、弥生時代後期後半に成立した斐太遺跡、弥生時代後期後半に成立し、古墳時代前期まで存続した釜蓋遺跡の三遺跡が密接に関連しながら展開した拠点集落の遺跡群。今回、釜蓋遺跡のうち条件の整った地点を追加指定する。

6 ^{さど きんぎんざんいせき} 佐渡金銀山遺跡 ^{さどし} 【新潟県佐渡市】

近世から近代に稼働した我が国を代表する鉱山遺跡。道遊^{どうゆう}の割戸^{わりと}で知られる相川^{あいかわ}金銀山、相川に先んじて開発された鶴子^{つるし}銀山^{にしみかわ}や西三川砂金山、さらに北沢浮遊選^{きたざわふゆうせんこうじょう}鉱場^{おおまこう}や大間港等の近代関係の施設からなる。今回17世紀前半に最盛期を迎え、多くの露頭掘跡^{るとうぼりあと}が残る新穂^{にいぼ}銀山跡^{ぎんざんあと}を追加指定する。

7 ^{おうみおおつのみやしにこおりいせき} 近江大津宮錦織遺跡 ^{おおつし} 【滋賀県大津市】

667年、天智^{てんじ}天皇^{あすか}が飛鳥^{うつ}から遷し、琵琶湖西岸に営んだ古代の宮跡。672年の壬申^{じんしん}の乱で廃絶した。これまでの発掘調査によって、内裏^{だいりせい}正殿^{でん}、南門^{かいろう}、回廊^{かいろう}、塀等の宮跡^{みやあと}中^{ちゆう}枢^く部分^{ぶぶん}が見つかっている。今回、内裏正殿の東側にあたる地点を追加指定する。

8 ^{せ た きゅうりょうせいさんいせきぐん} 瀬田丘陵生産遺跡群 ^{くさつし} 【滋賀県草津市】

7世紀末から8世紀、琵琶湖の南東部、瀬田丘陵に営まれた製鉄、製陶に関わる古代国家を支えた重要な遺跡群である。野路^{のじ}小野山^{おののやま}製鉄遺跡^{せいせき}は製鉄炉^{すみがま}、炭窯^{すみがま}、工房^{すみがま}、倉庫群^{くらぐん}などが確認された遺跡で、今回、炭窯を含む地点を追加指定する。

9 ^{へいあんきゅうせき} 平安宮跡 ^{きょうと} 【京都府京都市】

^{だいりあと}
内裏跡

^{ちやうどういんあと}
朝堂院跡

^{ぶらくいんあと}
豊楽院跡

延暦^{えんりやく}13年(794)、桓武^{かんむ}天皇^{ながおかきょう}が長岡京に替わる都城として造営した平安京の宮殿跡。天皇の居所である内裏跡、政務^{だいり}が執り行われた朝堂院跡、国家的^{ちやうどういん}饗宴^{きやうえん}が催された豊楽院跡からなる。今回、豊楽院の後殿である清暑堂^{せいしやどう}の一部を追加指定する。

10 恭仁宮跡（山城国分寺跡）【京都市木津川市】

奈良時代、^{しょうむ}聖武天皇が^{てんぴょう}天平12年（740）から足かけ5年間営んだ宮跡。後に山城国分寺に^{せにゆう}施入された。^{だいごくでん}大極殿の^{きだん}基壇や国分寺塔基壇が残り、発掘調査によって二つの内裏や朝堂院等が見つかっている。今回、宮域南^{つじべい}辺築地塀にあたる地点を追加指定する。

11 飯盛城跡【大阪府大東市】

戦国時代、畿内一円を支配した^{みよしながよし}三好長慶が拠点とした山城跡。標高314mの^{いいもりやま}飯盛山に築かれ、東西約400m、南北約700mで西日本有数の規模を誇り、戦国時代の政治・軍事を知るうえで貴重な遺跡である。今回は最南端にある^{かく}Ⅹ郭（南丸）を追加指定する。

12 和歌山城【和歌山県和歌山市】

紀の川河口部に位置する、^{きい}紀伊徳川家の居城となった平山城の近世城郭。^{とらふすやま}虎伏山に天守を設け、その東に本丸があり、これらの周りに二の丸、西の丸、砂の丸、南の丸を配置し、高い石垣と内堀で画する。砂の丸の南に位置する扇の芝の一角を追加指定する。

13 熊野参詣道【和歌山県有田郡湯浅町、日高郡日高町・印南町・みなべ町】

^{きいじ}
紀伊路

^{なかへち}
中辺路

^{おおへち}
大辺路

^{こへち}
小辺路

^{いせじ}
伊勢路

^{くまのがわ}
熊野川

^{しちりみはま}
七里御浜

^{はな いわや}
花の窟

平安時代から中世・近世を通じて利用された^{くまのさんざん}熊野三山への参詣のための道の一つ。今回は、紀伊半島西側を通る^{きいじ}紀伊路のうち、^{さかわおうじあと}逆川王子跡、^{きりめおうじあと}切目王子跡、^{せんりおうじあと}千里王子跡の三つの王子跡と、石畳の残る^{ししがせとうげ}鹿ヶ瀬峠、土道の残る千里王子跡北東参詣道の計5か所を追加指定する。

14 あおやかみじちいせき 青谷上寺地遺跡【とっとりし 鳥取県鳥取市】

日本海沿岸に点在するかたこ 瀉湖のほとりに形成された弥生時代前期から古墳時代前期にかけての集落。天然の良港としてぎよろう 漁撈活動や対外交易の拠点となり、海を介した他地域との交流を行う中で、物と技術が行き交った日本海側の拠点集落として重要。条件が整った地点を追加指定する。

15 まつえじょう 松江城【まつえし 島根県松江市】

松江市街地の中心部のかめだやま 亀田山に築かれたひらやまじろ 平山城で、天守のある本丸と二の丸などからなる。天守は国宝。堀尾吉晴によりけいちょう 慶長16年(1611)に完成した。今回、じょうざん 城山稲荷地区の中で条件が整った地点を追加指定する。

16 こべいせき 小部遺跡【うさし 大分県宇佐市】

大分県北部のすおうなだ 周防灘に面した平野部に立地する古墳時代前期を中心とする構造の変遷が明らかな集落遺跡。古墳時代前期初頭にかんごうしゅうらく 環濠集落として出現し、前期前半に環濠内に方形区画と大型掘立柱建物を伴う居館へと変遷する。この時期の社会構造の変化を考える上で貴重な遺跡。今回、条件の整った地点を追加指定する。

17 かまおこふん 釜尾古墳【くまもとし 熊本県熊本市】

古墳時代後期(6世紀前半から中頃)に築造されたえんぶん 円墳。埋葬施設はまいそうしせつ 横穴式石室でせんどう 羨道・ぜんしつ 前室・げんしつ 玄室からなる。前室と玄室には赤・青(灰)・白の三色で同心円文・三角文・そうきやくりんじょうもん 双脚輪状文等の文様が描かれており、そうしよく 装飾古墳として重要。本来の墳丘の範囲を追加指定する。

18 ちやたんじょうあと 北谷城跡【なかがみぐんちやたんちょう 沖縄県中頭郡北谷町】

13世紀後半から16世紀前半、沖縄本島西海岸沿いのぜつじょう 舌状丘陵に営まれたちゅうざん 中山地域の拠点となった城跡。東西約500m、南北約165mの範囲にきりいしづ 切石積み、のづらづ 野面積みの石垣や切岸により五つのくるわ 曲輪等を配置する。今回、「一の曲輪」等三つの曲輪の条件が整った地点について追加指定する。

《名勝の追加指定》 1件

1 西明寺本坊庭園【滋賀県犬上郡甲良町】

江戸前期に作られたと伝わる寺院の池泉庭園。地形を活かして斜面を築山とし、その前面に園池を設ける。既指定地の周囲を含む本坊の敷地全体及び取水源の河川が流れる谷を追加指定し、一体的な保護を図る。

《天然記念物の追加指定及び名称変更》 1件

1 種子島国上湊川・阿嶽川のマングローブ林【鹿児島県西之表市】

マングローブ林は熱帯から亜熱帯の汽水域に分布する森林であり、種子島のマングローブ林は、アジア地域における自然分布の北限地域として貴重なものである。種子島の北部にある湊川の群落を追加指定し、名称を種子島国上湊川・阿嶽川のマングローブ林に変更する。

《天然記念物の追加指定及び一部解除》 1件

1 琴平町の大センダン【香川県仲多度郡琴平町】

センダンは暖地に生育するセンダン属の落葉高木であり、本樹は、樹高14.5m、胸高周囲7.7m、枝張り東西28m、南北26mに達する国内屈指の規模を誇るセンダンの巨樹である。指定に係る意見具申時の地番の錯誤を是正するために、追加指定及び一部解除する。

《天然記念物の追加指定》 1件

1 御油のマツ並木【愛知県豊川市】

旧東海道に残されたクロマツ並木で、江戸時代の面影を残す数少ない代表的なマツ並木である。並木マツの根系を保護する目的で、道路敷である指定地の外側約15mを保存区域とし、順次追加指定を進めている。今回は条件の整った範囲を追加指定する。

登録記念物への登録

《登録記念物（遺跡関係）の新登録》 1件

1 徳島堰【山梨県韮崎市・南アルプス市】

徳島堰は、山梨県の中西部の中部山岳地帯である南アルプス山脈を構成する鳳凰三山や白根山地から流れ出る川によって形成された扇状地と、釜無川に挟まれた土地に対し農耕用の水を供給するために作られた用水である。延長は17kmである。甲府藩が江戸深川の商人徳島兵左衛門俊正に用水工事を依頼し、兵左衛門が寛文5年（1665）に釜無川から取水し工事を着手し、ほぼ完成させたといわれている。しかし、同年台風の水害により堰が大破したことから事業を断念し、その後は甲府藩の命令により寛文10年（1670）完成した。延宝3年（1675）の史料によれば徳島堰と呼ばれている。山から流れる諸河川の横断には、板関（平面交差）、掛樋（川の上を立体交差）、埋樋（川の下を立体交差）などの工法が河川の状況に合わせて施工された。昭和40年～48年に実施された釜無川右岸土地改良事業によって、徳島堰全線がコンクリート化されたが、慶応4年（1868）に描かれた絵図に記された位置の各所で、川や沢の下をくぐる暗渠が残っている。

以上のように、徳島堰は寛文10年の開削以降、修理を重ねながら利用され、地域の発展に意義があった用水である。

《登録記念物（名勝地関係）の新登録》 2件

1 岡山氏庭園（養浩園）【茨城県常陸大宮市】

岡山氏庭園（養浩園）は常陸大宮市高部地区に所在する。明治6年（1873）に高部に「花の友」（岡山酒造）を創業した岡山仙太郎（1833－1889）は、自宅と酒蔵の建つ敷地内に明治中頃に3階建ての楼閣「喜雨亭」を建築した。喜雨亭は水戸の偕楽園の好文亭を模して造られたと伝わっており、庭園も同時期に整えられたと考えられている。

住宅、酒蔵、庭園がある敷地は、北側が通りに沿い、東側を和田川、南側を緒川が流れ、南東部で合流する。敷地の西半分には住宅と酒蔵が建ち、東半分が庭園となっている。園内には喜雨亭のほか、石組護岸の流れ、中島のある園池等が設けられ、南に切り立った岩山がそびえる。養浩園では、多くの茶会や歌会等が開かれ、商売上の関係者、地元の政治家、文化人等が庭園や喜雨亭から見える岩山の眺望等を楽しんだ。また、庭園は近隣住民にも

開放され、人々は季節の花を愛で、冬には凍った園池で子供たちがスケートをして遊んだという。

岡山氏庭園（養浩園）は、近代の茨城県における造園文化の発展に寄与した意義深い事例である。

2 ^{ほうしていえん}法師庭園【^{こまつし}石川県小松市】

法師庭園は、石川県南西部加賀地方の^{あわづおんせん}粟津温泉に所在する旅館の庭園である。旅館「法師」は、^{たいちようだいし}泰澄大師が弟子の^{がりようほうし}雅亮法師に湯守を任せたとを始めと伝えられ、^{ゆもり}雅亮の養子がこれを継いで^{ぜんごろう}善五郎を名乗って当代で46代を数える。庭園は、高木の^{じゆそう}樹叢の下に苔むした景趣の中を縦横に打たれた飛石を辿って自由に散策できるように設えられており、明治44年（1911）頃に特別な宿泊別棟として建築された木造平屋建の^{えんめいかく}延命閣を挟んで大きく南側と北側の地割に分けられる。南側の地割は、さらに南東と南西の地割から成る。南東の地割では、東端に滝石組を設けて流水を導き南側の宿泊棟に添わせて細長い池泉を配し、その北側に二つの低い築山を設けて、延命閣の手前を平庭として築山北麓の間に大きな^{ゆきみとうろう}雪見灯籠を据え、南北に異なる風致を演出している。南西の地割には大振りの石で大きく組み上げた築山を設け、南東の地割から導いた^{やりみず}遣水をもその南麓に巡らせ、北麓から地割の西端にかけて広がる池泉へせせらぎを注ぐ。技術的には、遣水の護岸に^{ぎぼく}擬木を用いたり、園内に大型の石造物を据えたりして、大正時代から昭和初期にかけての流行を取り入れたことを窺わせる。

近代に整えられ、宿泊者の滞在を楽しませる旅館の庭園であり、時代を特徴づける造形をよく遺している事例として意義深い。